

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0470500315		
法人名	社会福祉法人キングス・ガーデン宮城		
事業所名	星谷ブランチ	ユニット名	
所在地	気仙沼市松崎面瀬17-1		
自己評価作成日	令和 4年 11月 8日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/">http://www.kaigokensaku.jp/</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	令和 4年 12月 8日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>自然豊かな環境であり、敷地内も広く、中庭等屋外での活動や行事を多く実施しています。コロナ禍で外部の方の参加はここ数年ありませんが、以前は家族様や地域の方を招いた行事も数多く行ってました。建物の2階にホームがあるので、入居者の移動に時間を費やしたりと不便なところもありますが、鉄筋建てなので地震などの災害に強く、川沿いではあるものの、道路からは数メートル盛り土されているので、豪雨災害時もほとんど心配ありません。他の施設の避難場所にもなっています。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>ホームはキングス・ビレッジビルの2階に居を構える1ユニットで、1階に障がい者グループホーム等が併設され、運営の様々な面で連携が図られている。職員は、ホーム理念をスマホに保存し、入居者の個性を尊重し、その思いを実現できるよう支援している。入居者個々の生活習慣を大切に、家事や趣味である裁縫、絵画等、出来ることをしてもらい、現有能力を活かし、ADL維持向上のため過介護にならないよう自立支援に努めている。新たな活動が芽生えメリハリのある生活につながっている。近隣のグループホームと運営推進会議や避難訓練に相互参加し、サービス向上に活かしている。</p>
---

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで身体や精神の状態に応じて満足出来る生活を送っている。 (参考項目:36,37) ○	66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12) ○
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○		

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 星谷ランチ )「ユニット名 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は昨年から引き続き、同じものを掲げ、日々のケアに実践している。職員ミーティング時等定期的に実践できているか振り返る機会を設けている。	理念について話し合い、「出来たこと、出来なかったこと」等の意見を踏まえ継続とした。日々のケアの中で、思いを引き出せるよう寄り添い、気づきを職員間で共有し、理念に沿ったケアを実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	去年同様、コロナ禍である為、日常的な交流はできていないが、屋外での草刈り作業を共にしたり、行事の際は作った物を届けたりした。	町内会に加入している。散歩時や入居者と一緒に隣家に回覧板等を届けた際、挨拶を交わしている。住民がホーム行事の手伝いや野菜をもらったり、ホームから行事食のおすそ分けをする等、近所付き合いをしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居申込みの時や施設の概要が知りたいと言った方に認知症の方への効果ある対応を事例を用いて説明したりした。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ感染予防の為、ここ1年は全て書面開催であったが、いただいたご意見を参考に行事等に生かす事ができた。	ホームから生活状況や行事、ケアの取組み、実地指導、外部評価等を報告している。メンバーから、行事提案の実施や家族へ入居者の画像をスマホで送信したことに対する感謝の返信がある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	ワクチン接種時に不明な点があり、何度か問い合わせを行った。地域包括支援センターから入所相談があった時などは定期的にその方の現状を聞いている。	介護認定更新やオムツ券、コロナワクチン接種案内、入居受入れ等を相談し、助言を得ている。大津波避難確保計画や感染症対策、認知症実践者研修に参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3か月に1度身体拘束適正化委員会を開いている。抑制にあたるか判断し、抑制にあたる場合は家族の同意を得て対応し、極力抑制が解除できるよう定期的に評価した。	身体拘束する場合の手順や代替案等の意見交換をしている。転倒が激しい方1名について、家族と一緒に考え、昼間は見守りで、夜間帯はベッドの前に大きなエアマットを敷いて、事故防止に努めているが、行動抑制と捉え、一連の手続きを行い実施している。	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	月一度のミーティング時に入居者への対応などについて話し合っている。言葉の使い方によっては虐待と捉えられる事例もあり、そのような言葉遣いをしないよう職員同士で注意喚起した。	虐待5項目の内容を理解し「不適切なケアがなかったか」職員間で確認し、虐待防止に努めている。言葉による抑制や口調の強い言い方等は、虐待行為の兆候であると捉え、尊厳に配慮したケアに取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居者の中に該当すると思われる方は無く、勉強する機会はほとんど無かった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	新規契約は無かったが、報酬改定時は事前に家族に連絡し、同意を得て、その後文章を発送している。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議の資料を一部家族に送り、意見をもらったりしたほか、電話した時等、希望を聞き取ったりした。	「居室で安全な生活させてほしい」要望は、家族と話し合い、危険な個所にクッション等を付けて対応している。写真に生活状況等のコメントを添え書きしている。要望は家族と共に共有している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は月1回職員ミーティングの時と朝の引継ぎ時に業務などに対する要望を聞き取った。毎月ではないが、管理者が法人本部と面談する機会があり、代表して職員の要望を伝えている。	所長の権限で対応できる要望は、直ぐに対応しケアの向上に活かしている。介護用品の買換えや空気清浄機、設備不具合の修理等に反映している。土・日曜日勤務は、職員の協力で働きやすいシフト作りに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年一度昇給がある。時間外労働があった場合は30分単位で手当を出している。シフト制なので重複しない限り希望休は取れるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人に届いた研修案内は即各事業所に伝達されている。感染症対策や災害時の対応に関する研修会に参加した他、認知症実践者研修に1名参加している。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナの為、グループホームの職員が集まる研修会は開催されていないが、近くのグループホームの運営推進会議や消防訓練に参加し、ホームの状況を報告しあった。	近隣のグループホームの運営推進会議や避難訓練に相互に参加し、ケアや災害時の協力等について意見交換し、サービス向上に活かしている。気仙沼市内介護事業者等による防災研修会に参加し、情報交換している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所が決まった段階で本にの実態調査を行い、本人の気持ちや希望を聞き取っている。認知症状がある時は本人を良く知っている家族に細かく話を聞くようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	15に同じで家族に細部にわたって聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホームの場合は他の居宅系サービスは利用できない事を説明し、重度化した時に他の施設に移った方が本人にとって良い事もある事を説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中でできる事は極力やってもらい、家事仕事(洗濯、掃除、調理)は毎日行ってもらっている。ADL向上維持の為、過介護にならないようにしている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナで面会できない日々が続いているが、届け物をされに来た時は現状を報告したり、ケアについて家族からの意見を聞くようにした。家族と会う事に効果があると判断した場合は、事訳を家族に話し協力してもらった。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	気軽な外出が出来なくなってしまったが、行きつけの美容室やかかりつけ医へ通う事は継続できている。訪問理容も理容師が何年も同じな為、馴染みの関係になっている。	家族や甥、姪等が面会に来訪している。遠くにいる息子へスマホで画像を送信し、繋がりが途切れないよう支援している。気仙沼地域がドライブコースとなっており、思い出に残っている場所として喜ばれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う入居者同士が過ごせるよう座席に配慮している。ドライブの時なども隣同士で楽しめるようにしている。孤立しそうな方には職員が寄り添い会話を楽しんでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去され、他の施設に移動した方でも、家族が近所であった事もあり、近隣の方として施設に差し入れ等してくれたりしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン作成時や日々の会話の中で希望を聞いたりしている。思うように言葉に表せない方や意思疎通困難な方は過去の言動や若い時の嗜好を基に生活を楽しむことが出来るようにしている。	個々の思いやこれまでの生活歴を汲み取り、写経や裁縫、絵画、折り紙工作等の思いや希望を実現している。表現するのが困難な方は、トイレに行きたい、菓子を食べたい等、指を指す等の仕草で分かるので対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	実態調査の時や入所後に本人との会話や家族との話の時に色々聞く事がある。入所して数年経っても新しい情報が入ってくることも珍しくない。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人個人をよく観察し、筋力の衰えや認知症状の進行把握に努め、現状に合わせた活動を行ってもらうようにしている。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	コロナで個室などでの会議はなかなかできないが、通院等の外出時や、届け物で施設を訪れた時に時間を取ってもらって話を聞き、プランに反映している。	本人や家族の要望を聞き、主治医の意見を基に、全職員で話し合い、現状に合わせた介護計画となっている。「認知症機能低下を防ぎたい」要望は、家事や好きな趣味活動等を盛り込んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	24時間の観察記録を手書きの記録表とパソコンに入力し、いつでも過去のデータを振り返る事ができるようにしている。変化があった時は病気も疑い、提携している訪問看護ステーションに相談している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	高齢者グループホームではあるが、隣接している障害者グループホームの入居者の方と交流が持てる支援をしている。感染対策をしたうえで、合同行事も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源と言つなら、行きつけの場所の他、三陸道の気仙沼架橋、大島大橋など入居者の方にとっては古くから馴染みの場所に新しい物がアレンジされた場所は刺激があるようでそこへのドライブを楽しみにしている方も多い。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医が協力医療機関であり、往診してくれるといった安心感が家族から得られている。眼科や皮膚科等専門医を受診した方が良いと思われる時は家族に相談し速やかに受診できるようにしている。	入居前からの主治医は1名で、他の方は協力医の訪問診療を利用している。通院は身体状態を記入した文書を持参し、家族が付き添っている。緊急時は、協力医や訪問看護師に連絡し指示を仰げる体制が整っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	27と同様、観察時や記録時等に変化が認められた場合は訪問看護師に相談している。特に入浴時に皮膚の異常が発見される事が多く、スマホを使って画像を送り、それを主治医に転送し、速やかに適合軟膏を処方してもらった事も多かった。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には施設から当日遅くとも翌日には情報提供を行っている。病院から退院の相談連絡が来た時は早めに話し合い機会が設けられるように日程調整している。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	まず入所時に重度化した場合の意向をざっくりではあるが尋ねている。生活していくうえで衰えが見られ始めた時に今後予想される事態を説明し、家族から希望を聞き取っている。	入居時に「重度化した場合における対応に関する指針」に基づき、家族へ説明している。段階的に希望を確認し、ホームで過ごされる場合は、「看取り同意」を得て支援している。協力医や訪問看護師、家族と連携を図り、看取り支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急搬送時の手順などは数カ月に一度確認し合っている。救急車要請の要否基準もその時に確認している。明文化したものが曖昧である為、見直しが必要と思われる。		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災の時は地域の方に協力をもらえるように声掛けしている。地震に強い建物であり、立地的に水害にも強いので他の施設の避難所として協定を結んでいる。	夜間想定を含む避難訓練は、併設している障がい者グループホーム等と合同で年2回実施している。近隣住民2名の参加があり、誘導や見守りをお願いした。消防職員から、併設職員との連携について助言があった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(16)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	下の名前で呼ぶ方、苗字で呼ぶ方に分かれている。昔から馴染まれている方で呼んでいる。事務的な声掛けにならないよう親しみを込めるようにしている。	入居者の出来る役割を大切に、尊厳を忘れずに気持を受入れ、抑制する言葉づかい等に気をつけている。衣類汚染時は、目立たない声掛けで対応している。入浴中プレートを作り、プライバシーに配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	生活のあらゆる場面で選択できるように声掛けしている。職員は意思の押し付けはしないように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事やおやつ、レクリエーション等、時間で声を掛けているが、本人が望まなければ、無理強いしないようにしている。それでも大きく生活のリズムが乱れないよう、メリハリはつけていただくようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分の意思で服を選べる方には好きなものを着てもらっている。化粧水や乳液を使う方等は残量を確認して、切らさないよう家族へ連絡し、補充している。		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	数は少ないが、皮むきや切り分けなどしてもらっている。食事前はテーブル拭きをほぼ全員にしてもらっている。食後は台所に立つ方、テーブルで食器を拭く方がいる。	一緒に作る稲荷寿司や餃子は、慣れた手つきで入居者が職員に教えながら作り、食べる楽しみにつなげている。季節を感じる栗ご飯やカボチャ粥等が喜ばれている。敬老会等の行事食や特別メニューは好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者個々の摂取適量の見極めを定期的に行い、その方に適した量を提供するようにしている。水分に関してはお茶や麦茶を好まない方には家族と相談してジュースやヤクルト、メイバランスを飲んでもらうようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの回数は個人ごとに異なるが、就床前は全員念入りに行うようにしている。歯磨き粉の他、洗口液を用いている方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツ類使用者は減る事は無かったが、失禁を減らす為、その方の排泄記録を分析し定期的に誘導している。夜間トイレに行くのが面倒くさいと言った方には居室にポータブルトイレを設置した。	個々の生活習慣や水分量、排泄間隔等に合わせた、声掛けや誘導等で自立支援に努めている。夜間帯は、排泄用品を替える等個別に対応している。適切な声掛けや誘導等で、失禁回数が改善された方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維が含まれる物は毎食提供するようにしている。牛乳、ヨーグルトの乳製品も毎日提供している。然しながら運動不足の方も多く、主治医に相談し、下剤に頼る方も何人かいる。		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	好きな時間に入れればいいのだが、結局は職員体制が手厚い時間帯になってしまっている。それでも不満の声は聞かれていない。菖蒲湯や柚子湯は毎年実施している。ヒートショックを避けるため、脱衣所の温度にも気を配っている。	入浴は週2～3回を基本とし、午後となっている。個々の好みの湯加減等で楽しく入浴している。家族の希望で、使い慣れた石鹸やシャンプーを使用する方もいる。湯上りのスポーツドリンクが喜ばれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々によって就床時間は異なっている。無理に寝させる事はせず、18時～22時の間と幅は広い。定期的に布団干しと寝具の洗濯を行い、気持ちよく寝れるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の説明書には職員が必ず目を通すようにしている。副作用や禁忌事項も理解するようにしている。新しい処方があった場合は、飲み始めからしばらくは体調観察に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族や関係者から昔の生活の様子を聞いて、昔好んでしていた事をしてもらった。グループホームでの生活の中で新たに興味を持ったり好きになったりする活動の発見もあった。		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナの為、思うようには出掛けられなかった。それでもドライブや人混みの少ない屋外への外出は何度かできた。	ホーム周辺や中庭を車椅子の方も一緒に散歩し、気分転換を図っている。赤坂公衆公園(紫陽花)やリンゴ狩り、道の駅大谷海岸等に出掛け、四季折々を肌で感じている。通院の帰りに家族とドライブしてくる方や職員の送迎で、選挙に出掛ける方もいる。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持して管理できている方は3分の1であるが、その方たちは散財するような方では無く、必要なれば使わなくていいという考え方な為、個人でお金を使う事は無かった。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙を書く事は無かったが、3分の2の方は頻度的に差はあるが、家族と電話で話が出来ている。遠くにいる子にスマホで顔を見ながら通話する事もできた。		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者の興味を引くような物を置くようにしたり、季節を感じられる木花を置いたりした。建物の構造上、冬季は室内に入り込む日差しが眩しすぎるのでカーテンを下ろしている時間が長くなってしまっている。	ホール兼食堂は、入居者が集い語り合ったり写経、かるた取り、裁縫する等、穏やかに過ごせる場となっている。季節感を演出するため、桜や百合の花、繭玉、七夕飾り、クリスマス暖簾等を飾っている。壁には、入居者が書いた虎の絵や習字等が掛けられている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	部屋で過ごす時間の多い方は常に空調を切らないでいる。入居者全員がホールでの席位置を理解しており、常にリラックスしている。廊下のソファの所が好きな方もおり、そこで職員と会話したりしている。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に使い慣れた物を持ち込んでいる。入所後部屋の模様替えはほぼ行わない。本人の良いようにしている。最近は居心地より、安全面重視の環境作りをしなければならぬ方が増えてしまっている。	使い慣れた衣装ケースや位牌、遺影、テレビ、時計、身の回り品等を持ち込んでいる。これまでの生活習慣を大切に、自由に過ごしやすい居室づくりをしている。好きなテレビを見たり読書する等、思い思い過ごしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレなどにはさりげなく貼紙をしている。部屋には小さなネームプレートを付け、覚えてもらうようにしている。		